

## 社會主義者としてのゼー・エス・ミル

河 上 肇

ジョン・ステュアート・ミルの經濟思想は、明治の初期、故田口卯吉博士及び天野爲之博士等に依り、日本の學界に紹介されしものにて、殊に天野博士の選述に成る『高等經濟原論』はミルの『經濟原論』の抄譯なりしやに覺ゆるが、古きことは姑く舍き、今日に於ても、ミルの此書は、官私立の諸大學に於て教科書として採用されつゝある所なれば、經濟學の書生にして此書を知らざる者は殆ど是れなき有様である。然るに此書の著者が一個の社會主義者にして、即ちかの原論は一社會主義者の著述なることは、不思議にも之を知らざる者が極めて多い。本篇の目的は、只此一面の事實をば、毫も余の推斷を交ゆることなく、専らミル自身の言明せる所に基き、之を明かにせんとするに在る。若し夫れ、ミルは假に社會主義者なりしとするも、果して如何なる種類の社會主義者なりしか、又彼は如何にして舊經濟學を棄て、社會主義に赴くに至りしが、猶又彼が此の如き思想上の變化を爲せし事は、當時の社會に於ける思潮の變遷に對し、如何なる連絡と意義とを有せしや等の問題に至りては、固より極めて興味ある問題たるを失はざれども、そは凡て他日に譲る積りである。

原論著作の當時ミルが已に一個の社會主義者たりし事を、彼自ら言明せる所の材料は、余の知

\* John Stuart Mill, Principles of Political Economy with Some of Their Applications on Social Philosophy, 1843.

る所に依れば、第一が彼の自叙傳であり、第二が彼の書簡である。

ミルの自叙傳は讀者の知らるゝ如く、彼が逝去の年を以て公にされたものなるが、其第五章\*を見るに、彼は、一八二九年乃至一八三〇年頃より初めてサン・シモン派の論著に親むに至りし事を述べ、次いで次の如く述べて居る。

『自由主義の共通思想に對する彼等（サン・シモン派）の批評は、私にとつて重要な眞理に充ちて居ると思はれた。さうして舊派の經濟學——それは私有財産及び相續をば廢止すべからざる事實となし、又生産及び交易の自由をば社會改良の最上の標語と爲せる所のもの——の甚だ制限されたる且一時的の價値を有するに過ぎざるものなる事に、私の眼を開いて呉れたのは、一部は彼等の論著の賜である。サン・シモンの學徒に依つて漸次に展開せらるゝ所の計劃に依れば、社會の勞働及び資本は社會全般の利益の爲に取扱はれ、各個人は思想家として、教師として、藝術家として、或は生産者として、一定の勞働を分擔し、且彼等の仕事に應じて報酬を受けると云ふのであるが、之はオウエンのそれに比すれば、私には社會主義の記述として遙に優れるものに考へられた。彼等の手段は如何に無効であるとしても、彼等の目的とする所は、私には希望すべき且合理的なるものと考へられた。さうして私は假ひ、彼等の主張する社會組織の實現し得べきものなる事又は有益なる働きを爲すべきものなる事を信ぜざりしと雖も、而かも私は、人類社會に關する此の如き理想の宣言は、今日の如き社會の状態をば、或理想的の標準に近づ

\* Autobiography, 1873. 1st ed., pp. 166, 167. (Popular ed., p. 93.)

かしむる爲の他人の努力に對し、必ず有益なる方向を與ふるに相違なかるべし、と感じた。』  
 以上は主としてサン・シモン派の論著の影響を述べたものであるが、ミルの思想を社會主義的に變化せしめたる他の有力なる原因は、後に彼の夫人となりしテイロア夫人の影響である。乃ち彼は、其自叙傳中一八四〇年(原論公刊に先づこと八年)以降の事を記述せる條下に、左の如く述べて居るのである。

『今や彼女(テイロア夫人)と手を携へて進むに至りし所の、私の精神的發達の、謂はゞ第三期に於て、私の意見は、廣さに於ても亦深さに於ても、一樣に得る所があつた。私はより多くの事柄を理解し、而して以前理解して居た事柄に就ては、今や一層徹底的に之を理解するに至つた。……………』

『吾々の意見は、嘗て私が最も極端なるペンタム主義を奉せし時代に有せし私の意見よりも、なほ遙に異端に屬するものであつた。社會制度の根本的改革の可能に就て以前有せし私の見解は、舊派の經濟學者に比して、さして進んでは居なかつた。今日理解され居る如き私有財産、及び相續は、彼等に於けると同じやうに、私にとつても、立法上の最高の標語モットーであつた。さうして是等制度の結果として生ずる不平等を匡正するの方策としては、私は長子相續法及び限定相續法を廢止すること位しか考へて居なかつた。或者は生れながらにして金持であるのに大多數の者は貧乏である、と云ふ事實の中に包まるゝ不公平を……………無くするが爲に、之より以上の方策を探ることが出來ると云ふ思想は、當時私は空想に過ぎぬものと考へた。さうして只自

分の望を屬して居た事は、教育を普及せしめ、以て人口の増加に對する任意的制限を助長する事に依り、一部の貧民の生活をば今少しく我慢し得べきものたらしめ得る、と云ふ位の事であつた。要するに、私は一個の民主々義者であつたけれども、毫も社會主義者で無かつた。然るに今や吾々は、私が嘗てありしより遙に弱き程度に於て民主々義者と爲つたのである。其は何故かと云へば、教育が今日の如く極めて不完全である限りは、民衆が飽くまでも無智で且特に利己的で又亂暴ならん事を、吾々は恐れたからである。乍併、社會改良の窮極の理想に關しては、吾々の考は民主々義よりも遙に進んだものであつて、吾々は明かに社會主義者と云ふ一般的名稱の下に分類されるべきものと爲つた。勿論吾々は、多くの社會主義的組織に包含すと考へらるゝ所の、社會の個人に對する專制に對しては、極力之に反對せんとする者であるけれども、而かも吾々は、社會が最早や怠け者と働き手とに分割することなき時代、働かざる者は食ふべからずと云ふ規則は、啻に救恤を受くる者に適用さるゝのみならず、公平に社會の總ての人々に適用さるゝに至る時代、勞働の生産物の分配は、今日の如く主として出産と云ふ偶然の出來事に依つて決定せらるゝ代りに、一般に認められる公平の原則に本き協議に依りて決定せらるゝに至る時代、又吾々が、全然吾々自身のみ利益でなく、吾々の屬する所の社會と共に之を分つべき利益をば、獲得するが爲に、其全力を發揮する事が、人間として到底不可能であるとか、又は不可能と考へらるゝとか云ふが如き事の最早や無くなる時代、かゝる時代の來るべき事を將來に向つて期待するに至つた。吾々は、將來の社會問題なるものは、如何にせば地上に於ける原料の共有と云ふ事と、共同の勞働に依つて生ずる所の便益に對する總ての者の平等の關

與と云ふ事をば、個人の活動の最大自由と云ふ事と、結合せしめ得るかに在り、と考ふるに至つた。吾々は、是等の目的が最も有効に實現せらるゝには如何なる形式の制度を必要とするかと云ふ事に就き、又は其の實現せらるゝは果して近き將來なるや將た遠き將來なるやと云ふ事に就き、精密に之を豫見し得べしと考ふるが如き臆斷を有つて居た譯では無い。吾々は、何等か此の如き社會的改造を可能ならしめ又は希望すべきものたらしむるには、今日労働者階級を組成して居る無教育なる人々并に彼等の雇主の大多數の者の上に、一樣なる品性上の變化が起つて來てからで無くてはならぬ、と云ふ事を明白に認めて居た。是等兩階級の人々は、今日迄の如く單に狭い目的の爲のみでなく、もつと廣い、少くとも公共的社會的の目的の爲に、勞働し且共同すると云ふ事を、實際に就て學ばねばならぬ。併し之を爲すの能力は常に人類に存し、而して將來とても無くなる事はなく、又無くなりそうにも無い。教育、習慣并に感情の養成に依りて、普通の人間でも、恰も自分の國の爲には何時でも戰爭に出るが如く、自分の國の爲に農業や工業に従事すると云ふ事に爲され得らるゝ。勿論人々が一般に此點まで向上すると云ふことは、漸を追うて、且長き時代に亘る教育制度の効果に依りて、始めて期待し得らるゝ事である。乍併、其故障は人間性の根本的組織の中に存在するものでは無い。共同の利益に就て利害を感ずと云ふ事は、今日では一般に甚だ弱い動機と爲つて居るけれども、之は其より外に仕方が無いからではなくて、只吾々の心が、朝から晩まで單に個人的利益に關係する事柄にのみ住して居て、公共の利益を考ふる事に慣らされて居らぬからである。……………現時の社會狀態の一般的特徴を爲せる所の深く根ざしたる利己なるものは、只單に、現時の制度の全體の仕組

が之を助長するの傾向あるが爲に、爾か深く根ぎして居るのである。……吾々は斯く考ふればとて、かの利己心に代はるべきものがまだ出来て居らず、又出来さうにも無いのに、其利己心を社會的事件に利用する事を廢止して仕舞ふのは、早計で愚かな事であると云ふことを、吾々は決して看過して居た譯では無い。乍併吾々は、現存せる總ての諸制度并に社會組織をば「單に、一時的のもの」であると看做し、例へば産業組合の如き、選ばれたる個人に依つて行はる、所の凡ての社會的實驗をば、最大の愉快と興味とを以て歡迎したのであつた。』

以上引用する所に依つて見れば、一八四〇年代(原論の公刊に先つこと八年前)のミルは「明かに社會主義者と云ふ一般的名稱の下に分類さるべきものと爲つた」のであつて、彼は「現存せる總ての諸制度並に社會組織をば單に一時的のものであると看做し」、「地上に於ける原料の共有」と『共同の勞働に依つて生ずる所の便益に對する總ての者の平等の關與』とを將來の社會に向つて望見しつゝあつたのである。然るに不思議にも此社會主義者の手に成れる經濟原論は、一般世人に依りて、非社會主義者の手に成れる社會主義攻撃の教科書なるかに想像されたのである。乍併、彼自身は、彼の原論を以て社會主義に反對せるものなりと爲せる批評に對しては、常に之を否認するを怠らなかつた者である。

試に彼の書簡集を見るに、例へば一八四八年十一月、米國紐育のジョン・ゼイに與へたる書簡には、『北米評論』に於ける彼の原論に對する批評に關し、次の如く述べて居るのである。

「謹啓、私は貴下が私の經濟原論の亞米利加版を贈つて下さつた事を忝く思ひ、厚く感謝の意

\* "Merely provisional."

\*\* 1st ed., pp. 230-234.

\*\*\* Letters of J. S. Mill, vol. I. pp. 137, 139.

を表せんとする者である。又私の著作を批評したる一文を載す所の「北米評論」を送つて下さつた事にも、御禮を申す。……記者は總ての種類及び程度の社會主義者に向つて嘲弄的の言葉を加へ、私を以て自分の仲間の如く書いて居るが、彼は此點に於て、此書及び其著者の思想を全然誤解して居るのである。私は、私有財産を廢止せんが爲に社會主義者に依つて主張せられたる特種の計劃に對しては、溫和に且議論を以て私の反對意見を述べて置いたけれども、併し他の多くの重要な點に於ては、私は彼等と一致する。さうして私は、彼等を以て人類の現状を改革するが爲の最大の要素であると考へて居るから、彼等に對しては私は只尊敬を有して居るばかりである。若し私が彼等を批評した章を書いた事が、大陸に於ける最近の革命以前でなくて以後であつたならば、私は社會主義に就て私の意見を一層委しく述べ、さうして一層公平に之を取扱つたであらう。』

猶彼が一八五二年三月十八日の日附を以て、彼の經濟原論を獨逸語に翻譯したるシェートニアに宛てたる手紙を見るに其中には次の如く述べてある。

『翻譯は極めて善く出來て居るやうに思ふ。……只私が残念に思ふのは、貴下の時間と苦心とが只今印刷中の版本(第三版を指す、そは一八五二年七月に公にさるゝに至りしもの)の上に加へられなかつたと云ふ事である。此改版に於ては啻に全體に亘つて訂正したのみで無く、種々の重要な章をば、私は全然之を改鑄したのである。就中財産及び勞動階級の將來に關する此の最も重要な二箇の章は殊にさうである。議論の進捗及び歐羅巴に於ける事件の進捗に伴うて此等の章に於て取扱つた問題の局面は、全然變つて來た。私が初めて此著書を書いた時に

\* Letters, vol. I, pp. 167, 168.

\*\* Book II, Chapter I. 及び Book IV, Chapter VII. を指す

は公平に聽いて貰へる望が餘程少かつたが、當時に比ぶれば、今日は此等の問題に關する私の意見を自由に且十分に告白する事が、餘程樂になつた。さうして又、私の意見そのものにも或變化が起つて來た。翻譯書の例言を見ると、貴下は讀者に向つて私の著書を社會主義の論駁書として推賞して居らるゝやうだが、勿論私は此書の中に於て、有名なる社會主義の極端論者に對し種々の非難を述べて置いたけれども、併し此等の議論を以て、社會主義をば人類改良の窮極の結果として見ても、同様に排斥すべきものであると爲したるが如くに解釋せらるゝならば、其は私の本來の考から明かに遠ざかつたものである。加之、其後更に考へて見た結果、私は此等の非難に對しても以前ほど重きを置かなくなつた。只其唯一の例外は勞働者階級がまだ不用意の状態に在りて、今日では社會主義の與ふる權利及び其の命ずる義務に對して、全然不適合の状態に在ると云ふ點のみである。新版に於て若し重きを置いてある非難があるとするれば、只此非難のみである。而して私は、貴下の翻譯書が、獨逸の讀書界に向つて、既に私の意見では無くなつたものをば、恰も私の現在の意見であるかの如く傳ふる事を悲むものである。……』更に同一八五二年三月二十日（前記の書簡より二日後）に獨逸のインリヒ・ラウに宛てたる書簡にも、之と殆ど同様の事が書き誌してある。

之によりて見れば、經濟原論の著者其人が社會主義に對し如何なる思想の所有者であり、又其著書經濟原論が社會主義に對し如何なる態度を採れるものなるかは、略ぼ明かである。而かもミルの生前に在つては勿論、彼逝いてより既に半世紀に垂んとする今日、猶彼の原論を以て『社會主義の論駁書』と爲す者あるは、一奇と謂ふべきである。